

内観の手法を援用した道徳授業実践

～絵本を活用した試み～

M11EP009

進藤英樹

1. 研究の目的

1-1. なぜ今道徳教育なのか

現代社会の急激な変化の中で、人間関係の希薄さ及び感謝の心の欠如が切実な問題として指摘されている。(貝塚, 2009) このような状況の中で、人間としての生き方の教育を推進し、将来の社会を担う子どもたちに対して「生きる力」の基本である道徳性を育てることは、これからの学校に課せられた重要な役割と考える。

平成18年に改正された「教育基本法」においても、その第2条(教育の目標)に「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」と記され、道徳の重要性が明記された。

道徳教育の充実は、今、まさに学校が取り組むべき喫緊の課題であると言えるだろう。

1-2. 新学習指導要領と道徳教育

改正教育基本法を受けて平成20年に改訂された学習指導要領では、「『生きる力』の核となる豊かな道徳性を育てる」・「全教育活動をとおしての道徳教育を充実させる」・「道徳教育の要として道徳の時間を充実させる指導体制を整える」・「自ら感じ、考え、判断し、道徳的实践ができる子どもたちを育てる」・「学校・家庭・地域の連携を深める」などの道徳教育を重視した姿勢を打ち出している。

特に中学校段階においては、中学校学習指導要領「道徳」の第1章総説にある、「多様な学習を促進する」や「役割演技など具体的な場面を通じた表現活動を生かすといった指導方法や教材等について工夫することが必要である」のように、指導方法や教材について、適宜工夫を図る旨が明記されている。

また、今までは「思いやり・人間愛・感謝」とされていた道徳の価値項目2-(2)が、「感謝」2-(6)として新設されたことは、中学生が現代社会の中で健やかに成長していくうえで、いかに

「感謝の心」が重要視されているのかを表している。

1-3. 子どもの実態

中学校時代は、一般に「難しい」とされ、他からの影響を大きく受けやすい発達段階である。筆者の経験からも自分が受けている様々な恵みに対して、心から「ありがたい」と考えることが少なくなっているように思える。また、良好な交友関係の中でも、ふとした瞬間の何気ない配慮に欠けた一言や粗暴な行動に、その場に居合わせた教師の方がドキドキさせられてしまう場面もある。実習校の子どもたちの生活の様子を見ていても、忙しい毎日の中で、ゆっくりと自分自身を振り返るゆとりを持っていないため、その恵まれた環境に感謝する余裕を持つことができずにいるように見える。

このような子どもの実態から、道徳教育によって「感謝」の気持ちを育み、その気持ちを上手に表現できる力をつける必要性が高まっている。だからこそ、改訂学習指導要領に「感謝」が新設されたのだと考える。今後も中学校の道徳教育を推進していくうえで「感謝」はひとつの要と位置づけられていくであろう。(有村, 2009; 他)

1-4. 本研究の目的

未来を担っていく子ども達に「道徳性」を培う必要性は先述のとおりであるが、その重要な役割を担っている道徳の時間ほど、期待と現実がかけ離れているものも少ないのではなかろうか。各学年・各学級が、年間をとおして指導計画通りに運営されることもまれで、時として、他の行事や、授業にとって代わられることもある。これほど道徳教育が必要と叫ばれているにも関わらず、他の教科などと比べると隅に追いやられている感は否めない。その原因として、道徳の時間の形骸化があるのではないだろうか。同僚教師からは「道徳教育(道徳の授業)

の有効性を実感できない」という声が聞かれ、生徒達からは「教師の言いたいことが初めからわかっているので、授業がつまらない」という声も耳にする。

そこで、本研究においては、指導者がその有効性を実感することができると同時に、生徒達が「おもしろい」と感じてくれる道徳の授業展開を目指しつつ、新設の「感謝の心」育成のための授業・題材の開発を目的とする。

2. 研究の方法

2-1. 内観法を道徳に取り入れる意義

「感謝の心」を育成する道徳授業として、内観法を取り入れた授業実践がいくつか報告されている。(斎藤, 2007; 諸富, 2007) 「感謝しなくてはならない」ことは誰もが「わかっている」ことであるはずだが、子どもたちの現実先述の通りである。今までの道徳の授業が、一方的に道徳的な価値を教え込むだけのものとなってしまうため、「理屈はわかっている、でも、実際に行動はできない」という人間誰もが持ち合わせているジレンマに陥っている。(飯野, 2005)

「感謝の心」を育てる道徳教育を実効性のあるものに高めていくためには、「理解している、わかっている」というレベルから、「心底そう思う」「実感している」というレベルまで深めていくことが必要である。(飯野, 2005)しかし、中学生では、まだ自らを深く顧みるという精神活動は難しいものであり、通常の教え込みタイプの授業ではそこまで到達することは困難である。そこに、「感謝の心」を育成するための有効な手立てとして内観法導入の意義がある。

内観法とは、「自分を知る」ための自己啓発法の一つであり、過去から現在にいたる自分に関する事実を、①「お世話になったこと」②「して返したこと」③「迷惑をかけたこと」の内観三項目にしたがって思いを巡らせることで、発想の転換を計るものである。(斎藤, 2007; 諸富, 2007)

内観法を道徳教育に取り入れることによって、自己中心的な見方から離れ、他から無償の愛情を与えてもらうことに「ありがたい」と感じながら、自分が多くの人に支えられて生きていること、他者に対して感謝と思いやりの気持

ちをもって生活していくことの大切さ、すばらしさを理解するようになることが期待される。

2-2. 学校における内観の授業実践

内観法を学校教育に導入するにあたっては、内観三項目によって思いを巡らせる方法だけではなく、実際の教育活動に即した取り入れやすい工夫がなされている。(斎藤, 2007; 諸富, 2007) 例えば、一人一人が内観ノートというものを持ち、自分で記録していく、「記録内観」や、10分程度で一日を振り返る時間を学級で持つ「ホームルーム内観」、大切な人を一人選び内観三項目について思いだし、ワークシートに記入し、それをもとに大切な人に手紙を書くという「ワークシートを用いた道徳授業」などがある。(飯野, 2005; 森田, 2005)

しかし、これらの実践では「迷惑をかけたこと」に注目がいってしまい、自己卑下に陥り罪悪感ばかりが強くなってしまおうという問題点がある。そこで本研究では、「お世話になったこと」を中心にポジティブな面を大切に扱っていききたい。

また、従来の純粋な内観だと、中学生が自分を振り返ることが難しく、深い内省には至らないのではないかと思われた。そこで、深い内省に導く手立ての工夫として、絵本の活用を試みた。

2-3. 実践の概要

①主題名 「お世話になった人」 2-6(感謝)

②資料名 「おおきな木」

シェル・シルヴァスタイン作

村上春樹訳 篠崎書林

③題材選択の理由

内観へと導くための有効な題材として「無償の愛」をテーマとしているこの絵本を選択した。

④ねらい

- ・自分が多くの人々に支えられて生きていることを理解する。
- ・他者に対して感謝する心を育てる。

⑤内容と手順

- ・教師が自己開示をする。(説話)
- ・「お世話になった人」を思い浮かべ、「お世話になった内容」を思い出す。(発表グループ)

- ・絵本「おおきな木」の映写を見ながら朗読を聞く。
- ・ワークシート(図1参照)の吹き出しに台詞を考える。
- ・振り返り用紙記入。

⑥指導上の工夫点

本来の内観法においては「迷惑をかけたこと」がとても重要なテーマとなるのだが、このテーマに注目しすぎると、反省会のような雰囲気となってしまう、ともすると罪悪感ばかりが強調されてしまうため、「お世話になったこと」を中心に内観させ「ポジティブ」な面を大切に扱うようにした。(導入段階であることも考慮)

- ・絵本を活用することで、生徒が主人公に自分を投影するための手立てとした。
- ・個の読解能力の差による「理解の深まり」の格差が生じないように、また、生徒の興味・関心が高まるように、セリフの部分は隠しておいて、絵の部分だけを提示し、教師の朗読によって読み聞かせを行った。
- ・漫画やアニメ世代である生徒の興味・関心を高めることをねらいとして、主人公の気持ちを絵本の吹き出しに書き込ませた。
- ・授業展開の流れを予測させないことで、集中力を高め、話しの終末に出てくる驚きや感動を新鮮なものにするために、ワークシートは一枚続きのものとはせず、必要に応じてその都度配布をした。
- ・気の弱い生徒でも自己を表現し、意見や考えを述べるができるように、挙手にこだわらずに、フリートークのような雰囲気、発表・発言ができる機会を設けた。

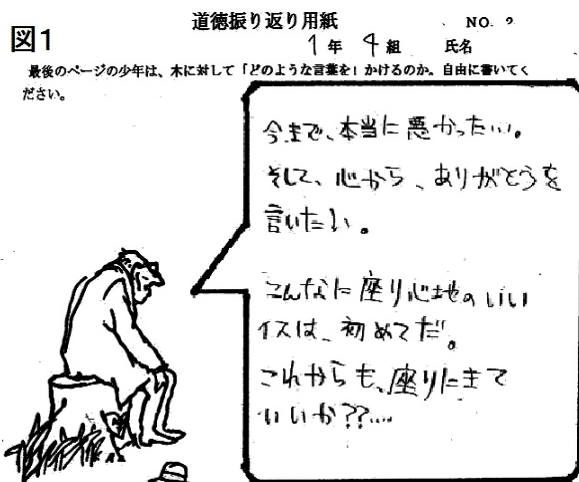
⑦実践の成果の見取りのポイント

吹き出しの中及び、振り返り用紙に感謝の言葉が綴られているか。

3. 結果と考察

3-1. 内観法を導入することの有効性の検討

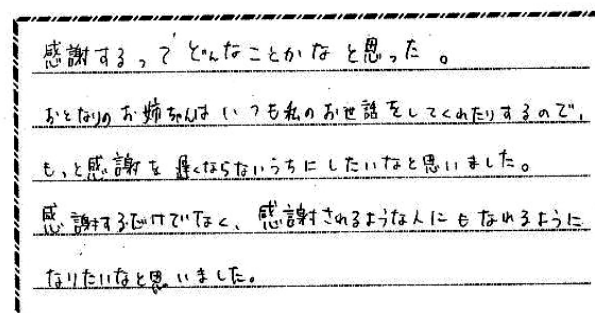
本研究においては、内観の手法を取り入れて「感謝」の心育成をねらいとした授業実践を行った。



結果として、図1に示したようなワークシートの吹き出しの中に「感謝」に関するセリフを書き入れた生徒は25名中20名いることから、この試みは大変に有効であったと言える。また、他にも、主人公から「おおきな木」に対して「ずいぶん、年をとるまでお世話になってしまった。私は何もしてやれないのに。若いときはゴメンなほしい物だけもらって行ってしまっ…昔はよく遊びに行っていたのに、年がたつほどいなくなってしまうってゴメン。だからこれから、毎日のようにここへ来て、お話をしようね。これが私からのお礼だよ。」等の記述が見られた。

図2 道徳振り返り用紙 NO. 3

1年 4組 氏名
・授業の感想や感じたこと、気がついたことなどを書いてください。



さらに、図2で示したような、授業の最後に書いてもらった、振り返り用紙の授業全体の感想の中にも「感謝」にまつわる記述が25名中15名見られた。他にも、「ふだん、いつも身近で、気づかなかつたけど、考えてみると、いつも何かやってもらっているの、だから少しでも、何か、手伝えたらいいなと思いました。」のような、普段はあまり意識していなかった周囲の

人への「感謝」をあらためて意識化させるということができていることが読み取れる記述があった。

以上より、「感謝の心」を育成するという本実践のねらいは達成された。

3-2. 指導上の工夫の効果

「絵本の吹き出しにセリフを書き込む」という工夫により、普段は、発言はするものの、なかなかワークシートに書き込むことができずにいた生徒も、短時間で書き込むことができていた。これは、吹き出しに書くという作業により、主人公と自分の同一化が進み、自己表現が助けられたためと思われる。

「挙手にこだわらない自由な雰囲気づくり」に関して、何人かの生徒から「発言しやすかった」「いつもと違う感じで良かった」などの感想や意見があり、プラスの効果があったと考える。また、授業の流れを最初から生徒に予測させないように分けたワークシートや、絵本を映写した工夫に関して、生徒達は授業の最後まで、興味や好奇心に満ちた様子で、教師の朗読や投げかけに集中していたことから効果があったと考える。

大きな目的として掲げた「生徒たちが“おもしろい”と感じる道徳授業」が展開できたかどうかについては、実習の最終日に開いていただいたお別れ会の作文に、「道徳の授業は面白い」という一言があったり、また、一週間に一回の道徳の授業の日に、朝の会が終わると「今日は何をするのですか」と筆者に質問をしてきたり、さらには、道徳の授業内容を知ると「ヤッター」と手をたたいて喜ぶ姿、「予鈴がなるとすぐに着席をして授業が始まるのを待っていてくれる生徒の存在」から、生徒達は道徳の授業を「おもしろい」と感じてくれていたと考えることができる。

3-3. 今後の課題

本研究を通して、「感謝の心」を育むことを目的とした、生徒たちが「おもしろい」と感じる道徳授業を提案することができた。同時に、生徒自身が「自分自身を振り返る力」を身につけていくことが、いかに重要であるのかを再認識することができた。

今後は、内観法だけにとらわれない、新しい「自分自身を振り返る」ためのプログラムを考案したいと考えている。そして、何よりも、生徒にとって、「心安らぐ場」であり「自分を振り返る場」となる道徳の時間の実践を積み重ねていきたいとも考えている。そのために、今後も多く新たな手法を用いた道徳授業開発にチャレンジしていきたい。

4. おわりに～実習の省察～

今回の実習はとても良い経験となった。勤務校であれば、「授業の導入」一つ取ってみても、あれほどじっくりと考えをめぐらせ、アイデアを練ることはなかったであろう。まさに、新採用以来の緊張感と試行錯誤の中での実習であった。

また、「道徳の授業実践には人間関係が必要不可欠」と考えていた自分の思い込みの誤りにも気づくことができた。人間関係が必要なのではなく、我々教師は「人間関係をつくるために道徳の授業実践を行っていくことが必要となってくる」ということを改めて実感することができた。

最後となりましたが、大変にお世話になりました、甲府市立北中学校の日野原晴夫校長先生、実習をお世話くださった米山洋子先生を始め、諸先生方、共に学校生活を過ごしてくださった生徒の皆さんに心からお礼を申し上げます。

【参考・引用文献】

- ・有村久春，他（2009）教職リニューアル ミルヴァ書房
- ・飯野哲朗，森田勇（2005）思いやりを育てる内観エクササイズ 図書文化
- ・貝塚茂樹（2009）道徳教育の教科書 学術出版会
- ・諸富祥彦，斎藤優（2007）学級経営と授業で使えるカウンセリング ぎょうせい
- ・文部科学省 中学校学習指導要領解説（平成20年3月告示）
- ・文部科学省 中学校学習指導要領解説（平成20年9月道徳編）